

徳富蘇峰記念館 目録——(19)

海を渡った先覚者

展示期間◇平成十四年一月七日～十一月二十九日

はじめに

一九九五年『徳富蘇峰宛書簡目録』を出版してから早や七年がたちました。一万一千人の蘇峰の友人の中から、海外の空気を吸い、外国から学んできた人々に注目してみました。海外からの絵葉書が沢山ある人は何かありそうです。好奇心に駆られ、各々の略歴を作りました。蘇峰への書簡によるオリジナルな背景は、わかったことから加えていきたいと思っています。今年には百人に登場願ひ、来年はまた百人を選び、海を渡った人々の志、精神、世界観等を知りたいと思います。

明治の人は背筋を延ばし堂々とし、語学が我々より身につけていたような気がします。維新後、明治政府はアメリカ、欧州に岩倉使節団などを送り積極的に欧米の文明を学ぼうとしました。海外に官費で、私費で、移民で、世界一周の旅で行った人などいろいろです。

蘇峰が外国で経験した二、三の出来事を追ってみましょう。二十八年日清戦争が終った直後の遼東半島でのことです。一度は日本の領土となった遼東半島を、ロシア・フランス・ドイツの三国干渉で返還しなければならなかった悔しさを、遼東半島の小石をハンカチに握り締め、力がなければ正当の権利も通らないと、蘇峰がくやし涙を流した話は有名です。道義が通る世の中を信じて、学問を重んじて育った蘇峰にとって、一大衝撃であったことは確かです。蘇峰は明治二十九年五月、深井英五と共に新聞事業視察のために欧米に出かけました。異国の文化に触れ、トルストイをはじめ、新聞人、小説家、政治家に逢っています。蘇峰の欧州からの通信「トルストイ翁を訪ふ」(明治二十九年十月十三日『蘇峰文選』)は活々とした文

章です。モスコイから汽車に乗り、ザセツカという田舎町にトルストイを訪ね、朝食と夕食を共にし、儒教のこと、孟子のことを話題にしています。深井英五が一緒でしたが、蘇峰の英語も冗談が通じたようです。馬に乗って散歩に出かけるトルストイの姿や、農家を見学し、板間に寝て、板間の隙間から馬鈴薯がころがっているのが見えるような、貧しい生活に驚いています。かつて遼東半島で感じた悔しさを、蘇峰はトルストイに次のように言っています。「日本国民の望む所は、世界列国の主となるにあらず。世界列国と対等の位地に立たんと欲する」と。トルストイは「余はロシア人にあらず。世界の市民なり」と答えて蘇峰と握手しました。蘇峰は帰国直後松方内閣の内務省勅任参事官になり、国民から褒節したと非難されました。三十九年中国を旅しましたが、中国の人口の多さに驚き、数の力に圧倒されました。新聞を数に乗せようという方針を立て帰国しました。中国に行かなければ気がつかなかった肌で感じた改革のきっかけでした。

日本言論報国会発足一周年の理事会席上(昭和十八年十二月)で、蘇峰は次のように語りました。「明治の政治家西園寺公望、陸奥宗光、伊藤博文が西洋の文明を取り入れるのに熱心であったこと。西園寺は日本人には、西洋の長短の見分けがつかうわけがないから何でも採るがよいという意見であったこと」などです。蘇峰は福沢のことを「福沢先生は西洋のことを無茶苦茶に輸入する点においては、伊藤や、陸奥の比じゃない」と福沢先生の欧米の文明を日本に取り込もうとした勢を指摘しています。蘇峰は「これまで七十年間に、或人は鞆で、或人は柳行李で、或人は風呂敷で、西洋の思想を運んできましたが、われわれは、かかる後を引き受けたものであることを自覚して、すべての先輩の残した長を採って短をすて、ここ七十年間に日本が進歩してきたところの現状に検討をくわえ、本当の意味に於ての日本精神、日本の文化、文明、歴史、思想を自分たちで樹立するようにすべきではないか」と語っています。私も大賛成です。

九十五歳まで生きた蘇峰を支えていたものは「自主日本」という「愛国心」と「読書」と「友人たち」であったと感じます。知れば知るほどいつもながら蘇峰の交友の広さと深さに驚かされます。海を渡った先覚者の紹介は又新しい蘇峰の姿をクローズアップしてくれると思います。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
青木周蔵 (19通)	1844～1914 弘化1～大正3 山口県	外交官。藩医青木研蔵の養子。洋学・医学を修め、慶応4藩費でドイツに医学留学したが、渡航後政治・法学に転科。在独中、外務一等書記官心得となり、岩倉使節団の副使として渡欧中の木戸孝允に西欧諸国の立憲制について説明し、プロシア(ドイツ)憲法を参考とした憲法私案「帝号大日本国政典」を提示した。明治19井上馨外相のもとで条約改正案を起草。山県・松方内閣の外相として対等条約を目標に条約改正交渉をすすめたが、明治24大津事件のため調印寸前で挫折。伊藤博文内閣の陸奥宗光外相と協力して、日清戦争直前に、日英通商条約の調印に成功。各国の大公使、3度外務大臣となる。	ドイツ イギリス アメリカ 他
青木文教 (12通)	1886～1956 明治19～昭和31 滋賀県	大正・昭和期のチベット学者。浄土真宗本願寺派正福寺に生まれる。法主大谷光瑞に派遣され、明治45～大正5にかけて、グライ＝ラマ13世の弟子としてチベットに滞在。チベット語学・歴史・文化一般を研究。晩年東大講師としてチベット語を教えた。著書『西藏遊記』『西藏文化の新研究』	チベット
赤木格堂 (亀一) (70通)	1879～1948 明治12～昭和23 岡山県	俳人・歌人・新聞人。早大卒。衆議院議員。子規に有望な新人として紹介された。『九州日報』『山陽新報』の主筆。新聞『日本』の俳句欄担当。外国からの絵葉書多し。 *巴里人(パリびと)は風流(みやび)なきかも望月(もちづき)の此(この)夜の月を顧みもせず	フランス
朝河貫一 (10通)	1873～1948 明治6～昭和23 福島県	歴史家。東京専門学校(早大)卒。アメリカに渡り、エール大学大学院で学ぶ。明治39からエール大学で教鞭をとり、36年間にわたり日本史とヨーロッパ中世制度史を論じ、エール大学名誉教授となる。昭和15年には天皇に日米戦回避の上奏をした。	アメリカ
朝比奈知泉 (礎堂) (50通)	1862～1939 文久2～昭和14 茨城県	ジャーナリスト。東大中退。『郵便報知新聞』記者を経て、東大法科入学。在学中『東京新報』主筆として政治評論を行う。明治25『東京日日新聞』主筆。条約改正、遼東半島還付問題などをめぐり、政府側を代弁し、在野の対外強硬派と論争するなど、言論会の代表的存在。明治28～29、明治34、35と外遊。蘇峰・陸羯南とともに新聞界の3傑といわれる。蘇峰・森田思軒とともに「文学会」の主唱者。東大を落第した時、蘇峰に勇気づけられたという。	アメリカ イタリア ドイツ など
安倍能成 (1通)	1883～1966 明治16～昭和41 愛媛県	教育者・哲学者。東大卒。在学中オイケンに学び、カント哲学を研究。野上豊一郎・小宮豊隆らとともに夏目漱石の門下。大正13ヨーロッパ留学。帰国後、京城帝大教授、昭和15一高校長。昭和21文相となる。その後、学習院院長。全面講和を主張、平和運動の発展に尽くした。哲学書の翻訳や西洋哲学史の著作の他、エッセイスト、能楽の保護育成者としても知られる。昭和21年、紀元節のラジオ放送の講演をした。昭和20年は蘇峰が講演。	ヨーロッパ
安達峰一郎 (19通)	1869～1934 明治2～昭和9 山形県	外交官・国際法学者。東大卒。日露戦争後のポーツマス講和会議の日本全権委員随員として出席。ジュネーブでの「国際紛争平和的処理議定書」で日本の立場を説明する峰一郎の様子をみて、当時の国際連盟事務次長の新渡戸稲造は「安達の舌は国宝だ」とそのフランス語の説得力を絶賛した。国際連盟日本代表。正義と公平にもとづく見識は、各国から厚い信頼と尊敬を得た。昭和5常設国際司法裁判所所長。任地オランダで客死。その業績により、昭和9オランダ国国葬・常設国際司法裁判所所葬として葬儀が営まれた。	欧米各国

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
家永豊吉 (2通)	1862～1936 文久2～昭和11 熊本県	欧米における生涯学習の原型“University Extension Movement”(大学教育普及)の先駆的紹介者。熊本洋学校から同志社英学校へ進む。熊本バンドの一人。父辻維岳は横井小楠の旧知。家永家の養嗣子となる。蘇峰は同志社生活の中で、親しい友人として杉田(元良)勇次郎、家永豊吉、木全(大西)祝の3人をあげている。明治17渡米、オベリン大学からジョンス・ボブキンス大学に進み、明治23帰国。明治30外務省入省。明治32台湾総督府民政長官後藤新平の命により、インド・ベルシャ・トルコ等各地の阿片調査並びにインド政府の施政と日本の植民地政策との関係を調べる為、総日数289日間、総里程22,305里の西亜細亜調査旅行を敢行した。その後、再渡米し、コロンビア大学・ハワイ大学で日本に関する講義を担当。昭和11魚釣り中、ニューヨーク洲オニータ湖の凍結した亀裂に踏み込み溺死。(太田雅夫著『家永豊吉とUNIVERSITY EXTENSION』参照)	アメリカ インド ベルシャ トルコ
石黒忠恵 (況斎) (98通)	1845～1941 弘化2～昭和16 陸奥(福島県)	軍医。軍医制度確立者。医業を志し、江戸に出て医学所に入学。明治4兵部省、一等軍医となり、佐賀の乱、西南戦争に従軍。明治23陸軍軍医総監となる。日清戦争では野戦衛生長官をつとめる。森鷗外の上官で、二人の間に確執があったとされる。	清(中国)
伊藤博文 (春猷) (3通)	1841～1909 天保12～明治42 山口県	指導的政治家。吉田松蔭の門下。文久3井上馨らと密かに渡英。明治4岩倉使節団の副使として欧米を視察。明治15憲法調査のため渡欧、プロシア憲法を学んで帰国。井上毅・伊東巳代治・金子堅太郎らと憲法起草にあたり、明治18内閣制度を創設して、初代総理大臣となり、のち3度内閣を組織。また枢密院議長、貴族院議長などを歴任、明治33には立憲政友会を結成、初代総裁となる。明治42ハルビン駅頭で朝鮮独立運動家安重根に暗殺された。明治30年以後、蘇峰と伊藤の関係は始まる。博文は英文を格調高い日本語に訳すことを蘇峰に頼んだことがある。	欧 米
稲垣満次郎 (9通)	1861～1908 文久1～明治41 長崎県	外交官。長崎監獄に職を持ち、のち上京して中村正直の門に入る。旧藩主松浦厚に随行して、イギリスに渡航、ケンブリッジ大学に遊学。南進論者。外交官としても活躍したが、著書「東方策」その他の言語活動により日本の太平洋進出を唱えた南進論者の先駆けとして著名。明治30初代駐タイ公使。スペイン特命全権公使となり、同地にて客死。	イギリス タ イ スペイン
井上哲次郎 (巽軒) (9通)	1855～1944 安政2～昭和19 福島県	哲学者。東大卒。幼少の頃より漢学塾で学び、漢学の知識を身につけた。明治16『倫理新説』発表、更に日本最初の哲学辞典『哲学字彙』を編集・刊行。外山正一・矢田部良吉らと『新体詩抄』刊行。明治17～23までドイツ留学。西洋哲学の方法により、儒教を中心とする東洋哲学の解明を試みる。教育勅語の注釈書『勅語衍義』を著す。明治26『教育と宗教との衝突』を雑誌に連載。キリスト教を反国体的宗教として排撃し、反響を呼んだ。	ド イ ツ
井上 秀 (2通)	1875～1963 明治8～昭和38 兵庫県	日本女子大学第4代校長。井上家を継ぎ、足立雅二と結婚。京都天竜寺に参禅。明治41コロンビア師範大学に留学。衛生学、栄養学を学び、シカゴ大学で社会学、経済学を学び、婦人に関する諸問題を研究。(日本女子大学編『日本女子大学事典 創立100年の軌跡』参照)	アメリカ ド イ ツ フランス ロ シ ア
井上雅二 (11通)	1876～1947 明治9～昭和22 兵庫県	井上家に養子縁組。秀と結婚。明治29東京専門学校に進み、卒業と共に東亜同文会上海支部幹部に就任。ウーン大学、ベルリン大学に学び、東欧・中央アジアを視察して帰国。民友社から明治36『中央亜細亜旅行記』明治44『四大陸遊記』を出版。(参考文献は井上秀に同じ)	中央アジア 東 欧

氏名(号) (蘇峰宛書簡欄)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
入 沢 達 吉 (41通)	1864～1938 元治1～昭和13 新潟県	医学者。12歳の時上京。明治22東大医学部卒業。ベルツ教授の助手をつとめた。明治23ドイツ留学、帰国後ベルツの後任となり、退職後東大名誉教授。大正12以来、外務省対華文化事業などの仕事でたびたび訪中、中国の政・財界人や医学者と交流した。	ド イ ツ 中 国
岩 崎 小 弥 太 (1通)	1979～1945 明治12～昭和20	大正・昭和期の実業家。岩崎弥之助の子、弥太郎の甥。ケンブリッジ大卒。三菱財閥最後の指導者。	イギリス
岩 崎 弥 之 助 (2通)	1851～1908 嘉永4～明治41 高知県	実業家。岩崎弥太郎の弟。三菱財閥二代目。明治5アメリカ留学。明治18岩崎弥太郎の死後、社長。明治26三菱合資会社を設立、三菱財閥の基礎を築く。校勘学者島田翰の働きで中国の4大蔵書家のひとつである陸心源(函宋楼)の蔵書を岩崎弥之助が買取り、散逸されることなく静嘉堂文庫に帰した。	アメリカ
巖 谷 小 波 (季雄) (21通)	1870～1933 明治3～昭和8 東京	小説家・童話作家。尾崎紅葉らの硯友社同人として、『初紅葉』などを書き新進作家となる。明治24、創作童話『こがね丸』を発表し新生面を開いた。明治27博文館入社、『少年世界』の主筆となり、毎号執筆の少年文学・おとぎ話は人気を集めた。『日本お伽噺』『世界お伽噺』の出版にも尽力。童話口演など児童文学に貢献した功績は大きい。ベルリンよりの絵葉書あり。	ド イ ツ
内ヶ崎作三郎 (8通)	1877～1947 明治10～昭和22 宮城県	学者・政治家。大政翼賛会総務。内務参与官。早稲田大学教授。明治41英国ユニテリアン協会の推薦留学生として、オックスフォード大学で宗教学、英文学を研究。大学の絵葉書展示。	イギリス
内 村 鑑 三 (5通)	1861～1930 文久1～昭和5 江戸	キリスト教の代表的指導者。クラーク先生の札幌農学校卒業後、アメリカに留学。アマースト大、ハートフォード神学校に学びキリスト者となる。明治24一高講師の時、信仰上の理由で教育勅語に対する敬礼を拒否し「不敬事件」で免職。明治27日清戦争に際して「義戦論」を唱える。明治30に『万朝報』の英文主筆に迎えられたが日露戦争に際して「非戦論」を主張して退社。以後伝道・研究・著述生活に入る。「無教会主義」を唱える。	アメリカ
大久保真次郎 (1通)	1856～1914 安政3～大正3 熊本県	医師・牧師。蘇峰の姉音羽子の夫。熊本医学校に学び、北里柴三郎とともに東大医学部で学ぶ。牧師となりアメリカで伝道。明治29年8月28日付の書簡はロンドンの蘇峰に宛てたもの。	アメリカ
大 倉 喜 八 郎 (鶴彦) (41通)	1837～1928 天保8～昭和3 新潟県	実業家。大倉財閥の創設者。明治1戊辰戦争の際、官軍に武器を売りこみ多大の利益を収めた。明治5欧米に商業視察旅行、翌年貿易商として大倉組商會を設立。台湾征討、西南戦争、日清・日露戦争での軍需品の調達・輸送で巨利を得る。明治11渋沢栄一と東京商法會議所を設ける。明治35日本人として最初の対華借款を結び、朝鮮・中国・満州で貿易・現地事業を行う。東京経済大学の設立など、教育界にも関心を示す。	欧 米
大 谷 光 瑞 (鏡如) (240通)	1876～1948 明治9～昭和23 京都	西本願寺宗主代21世光尊の長男。歌人九条武子の兄。法名鏡如。貞明皇后の姉九条箒子と結婚。明治35西本願寺の武庫中学生を率いて西域、インド探検隊を組織、インド仏蹟を調査。父の死により帰国、管長に就任。父の遺言で蘇峰に師事した。イギリス留学、二楽荘の建築、武庫中学の経営、日清戦争に奉仕し、本山の財政上の批判が起こり、責任を取り潔く退いた。以来、中国・南洋・トルコなどで農園を経営。大正8光寿会を興して総裁となり機関誌「大乘」を刊行。蘇峰は光瑞の著書を民友社から多く出版して、光瑞の健在を世にしめた。	西 域 イギリス トルコ 南 洋 中 国

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
大西 祝 (操山) (26通)	1864～1900 元治1～明治33 岡山県	哲学者。同志社・東大卒。『六合雑誌』の編集にたずさわる。東京専門学校で教鞭をとり、論理学、心理学、倫理学、美学、西洋哲学史等の哲学部門を担当。明治31文部省よりドイツ留学。内村鑑三の不敬事件では、井上哲次郎らを弾劾し内村を擁護。蘇峰主唱の「文学会」に出席。	ドイツ
岡倉天心 (覚三) (4通)	1862～1913 文久2～大正2 横浜	美術行政家・思想家。東大卒。在学中にフェノロサを知り、影響を受ける。卒業後文部省に入り、古美術の保護、美術の普及、美術教育調査にあたる。明治19美術取調委員としてフェノロサとともに欧米に渡る。明治22年東京美術学校の創立に尽力、校長に就任。明治31「美術学校事件」により校長を辞したが、橋本雅邦や門弟横山大観・菱田春草らをひきいて日本美術院を創立。明治34インドに赴き、明治37のアメリカ旅行でボストン美術館東洋部管理者に就任。『The Ideals of the East』(東洋の理想)『The Book of Tea』(茶の本)『The Awakening of Japan』(日本の目覚め)などを刊行し、日本および東洋の文化・芸術的優秀性を内外にうったえた。蘇峰は日本美術院主催の展覧会に協力。美術院が地方で展覧会を開催するときには、知事、市長など力のある人の紹介を願っている。	アメリカ インド
岡崎邦輔 (長坂)(晩香) (4通)	1854～1936 安政1～昭和11 岩手県	政党政治家。陸奥宗光の従弟。明治21特命全権公使陸奥宗光に従い渡米、ミシガン大学に学ぶ。陸奥の死後、星亨とむすび自由党、憲政党・政友党の枢機に関与。有数の策士。犬養毅・尾崎行雄らと憲政擁護・桂内閣打倒運動をおこす。	アメリカ
賀古鶴所 (1通)	1855～1931 安政2～昭和6 千葉県	医師。ベルリン大学で耳鼻咽喉科を修める。東大の同窓、森鷗外とは、終生の親友。硬派の学生賀古は常に林太郎(鷗外)の庇護者となる。鷗外の臨終の際、遺言を口述筆記し、「爵位をもらうな」もそのひとつであった。山県有朋にも信頼された。	ドイツ
夏秋亀一 (4通)		明治25東邦協会露西亜語学校に入学したが、まもなく退学。明治32東京帝国大学法学部政治科卒。その後ロシアに赴き、モスクワを中心に各地を視察、ロシア女性と結婚した。明治35モスクワで後藤新平と会見し、以後その腹心として日露政治折衝の裏面で重要な役割を果たした。特に後藤の満鉄総裁就任後は、満鉄社外理事格で後藤の親露政策にそって活躍した。明治41『大阪朝日新聞』の特派員としてペテルブルグに赴任した二葉亭四迷と知り合い、彼の病気の世話をしたことで有名である。後藤の死後は著述に従事し、もっぱら反共、反財閥を主張した。(沢田和彦「日本における白系日本人史の断章—プーシキン没後100年祭(1937年、東京)—」参照)	ロシア
勝海舟 (麟太郎、安芳) (10通)	1823～1899 文政6～明治32 江戸	幕末・明治期の政治家。万延1日米修好通商条約批准のため、外国奉行新見正興らが渡米する際、咸臨丸艦長として乗組み、日本人最初の太平洋横断航海に成功。王政復古後政府の東征夷軍に対して旧幕府軍を恭順にみちびき、西郷隆盛と協定して、江戸城を無血の状態で明け渡した。蘇峰は「先生は森にあらずして一株の大樹なり。老幹半空に蟠る枝葉空を翳す、就いて其の陰に憩うもの幾百千人を知らず」と語り、海舟を「人間学の大家」と見ぬいていた。	アメリカ
加藤高明 (11通)	1860～1926 万延1～大正15 愛知県	外交官・政治家。三菱会社に入社後、岩崎弥太郎の知遇を得て、明治16イギリスに遊学。実業界に地位を築いた後、政・官界に転じ条約改正・日英同盟改訂など外交方面に手腕を発揮。外遊中の蘇峰に宛てたイギリスからの書簡6通(巻物)が展示中である。明治37東京日日新聞社長。第24代総理大臣。	イギリス

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
金子堅太郎 (45通)	1853～1942 嘉永6～昭和17 福岡県	政治家。ハーバード大卒。明治4藩主に伴い渡米、法学を修めた。伊藤博文のもとで、井上毅・伊東巳代治と共に明治憲法起草の枢機に参画。欧米議会の典例に通じ憲法付属法令の制定に貢献。日露戦争中は知己の多いことから米国に特派され諒解工作に従う。	アメリカ
川上音二郎 (1通)	1864～1911 元治1～明治44 福岡県	新派劇の俳優。福岡藩の御用商人専蔵の子。裁判所給士、新聞記者などをし、自由民権運動に参加。「演説遣い」になり「自由童子」と称した。明治20川上音二郎の芸名で歌舞伎俳優に加わり京都で出演。ついで大阪落語家桂文之助に弟子入り、高座に出、オペケペー節で人気を得た。明治27東京浅草に進出、相馬事件や日清戦争の実況戦争劇を上演し成功。明治29神田三崎町に「川上座」を建て新派劇をきり開く。欧米巡業ののち、明治36「正劇」と名のり、江見水蔭の翻案した『オセロ』などを上演。明治43大阪に「帝国座」を建設。川上貞奴は妻。展示中のイギリスよりの絵葉書には「王室から2千円いただいた」と報告している。	アメリカ イギリス フランス など
神田乃武 (1通)	1857～1923 安政4～大正12 江戸	英学者。ウェストフィールド師範(アメリカ)。明治4から12、森有礼に従いアメリカに留学し、アマースト大学で教育学を学ぶ。明治32外国語学校長、一高教授。明治43貴族院議員。大正10ワシントン軍縮会議随員。わが国英語学の発達に尽力し、辞書・教科書を著す。外山正一・元良勇次郎らと正則予備校を創設し、2代校長となった。	アメリカ
北里柴三郎 (3通)	1852～1931 嘉永5～昭和6 熊本県	細菌学者。東大卒。内務省衛生局に入り、明治18ドイツに留学、ロベルト＝コッホに師事。明治22破傷風菌の純粹培養に成功、翌年血清療法を発見し、世界的研究成果を残す。明治25帰国。福沢諭吉の後援で伝染病研究所を設立。明治27香港でペスト菌を発見。同研究所は赤痢菌の発見者志賀潔らのすぐれた所員を擁し、ドイツのコッホ研究所、フランスのパスツール研究所とともに世界の三大研究所といわれる。大正3東大の付属機関となるに際し、私立の北里研究所を設立。大正5慶大医学部の開設とともに部長として招かれる。大正12日本医師会創立とともに、初代会長となる。展示中の書簡には、(民友社社員の診察)のことが書かれている。	ドイツ
久保田米遷 (24通)	1852～1906 嘉永5～明治39 京都	画家。明治13幸野椋嶺らと共に京都府立画学校を創立。明治21京都美術学校を創立。同年フランス留学。帰国後蘇峰の招きに応じ民友社に入り、『国民新聞』に挿絵を描いた。破格の給料であった。(蘆花11円、事務員5円、米遷70円) 明治26シカゴ博覧会に自費で渡米。日清戦争に画報記者として従軍。明治29第4回国内博覧会審査官、岡倉天心の勧めで教職に就く。明治天皇の御前で絵を描いた。	フランス アメリカ
光妙寺三郎 (1通)	1847～1893 弘化4～明治26 山口県	一向宗光妙寺の住職半雲の3男。神童の名が高かった。長崎でフランス語を学ぶ。明治3西園寺公望の秘書として渡仏。フランス憲法を学ぶ。留学6年。中江兆民を知る。『東洋自由新聞』記者。フランス公使館書記官。明治法律学校で憲法を講じる。	フランス
後藤新平 (47通)	1857～1929 安政4～昭和4 岩手県	政治家。福島県須賀川医学校卒。明治15刺客に襲われた板垣退助を治療。明治23医学研究でドイツ留学。内務省衛生局長として衛生行政にかかわる。明治31台湾総督児玉源太郎に抜擢され、総督府民生局長に就任、台湾の鉄道網づくり、樟脳・塩・砂糖の専売、阿片漸禁など台湾経営に手腕を振るう。明治39南満州鉄道初代総裁。大正8外遊、米・フランス・ドイツ・ロシアを巡る。同行者は新渡戸稲造。大正9東京市長就任、関東大震災直後の東京市復興計画を立案。辞職後は放送事業、青年団運動にたずさわり、昭和2訪ソして日ソ親善につとめた。蘇峰を漢詩の師とする新平から、漢詩の添削を願う書簡多数あり。	ドイツ アメリカ ロシア フランス

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
小村寿太郎 (2通)	1855～1911 安政2～明治44 宮崎県	外交官。大学南校(東大)卒、文部省留学生として米国ハーバード大学に留学。陸奥宗光に見出される。米、露、清の公使となる。明治35日英同盟を締結し、ロシアに対抗。さらに欧米の黄禍論を鎮めるために、金子堅太郎をアメリカに、末松謙澄を欧米に派遣。明治38ポーツマス条約に全権として調印。蘇峰はこの講和条約を支持したため。反対する民衆により国民新聞社が焼討に遭う。	アメリカ 中 国
西園寺公望 (陶庵) (37通)	1849～1940 嘉永2～昭和15	政治家・公爵。ソルボンヌ大学卒。明治4渡仏。10年滞在し、アコラス法学を学び、クレマンソーらと交遊、中江兆民らを知る。帰国後明治法律学校(明治大学)設立。『東洋自由新聞』社長。この新聞は政府の干渉で、すぐに廃刊したが、蘇峰は大江義塾で読んでいた。明治15伊藤博文に随行して、憲法調査のため渡欧。日露戦争後、桂太郎と交互に政権を担当「桂園時代」を画す。『知友新稿』に題字。	フランス ド イ ツ オーストリア 他
斎藤茂吉 (茂吉) (28通)	1882～1953 明治15～昭和28 山形県	歌人・医学博士。斎藤紀一の養子。東大医学部卒。明治39伊藤左千夫の門下となり『馬酔木』『アララギ』に短歌や評論を発表、左千夫没後は島木赤彦らとアララギ派の中心的歌人となる。大正10文部省在外研究員としてドイツ、オーストリアに派遣され、4年間精神病学の研究に専念。大正14帰国。翌年養父の後を受け、青山脳病院院長となる。赤彦没後は『アララギ』を背負って活躍。	ド イ ツ オーストリア
酒井雄三郎 (茫茫学人) (34通)	1860～1900 万延1～明治33 佐賀県	政治・社会評論家。明治12仏学塾に入り、中江兆民に師事。農商務省に入り、明治23パリ万博の為に明治22フランスに派遣される。在仏中社会問題に関心を寄せ、パリ大、ブリュッセル大で学び、雑誌『国民之友』に「社会問題」「社会党の運動」などを寄稿。明治25帰国後、社会問題研究会を創設。明治33『朝日新聞』記者として再び渡仏。12月パリにて客死。自殺とも言われている。師である中江兆民は雄三郎の死を知り、蘇峰に『国民新聞』に雄三郎のことを載せて欲しいと依頼する。	フランス ベルギー
志賀重昂 (規川) (59通)	1863～1927 文久3～昭和2 愛知県	地質学者。札幌農学校卒。教員をへて、明治19海軍練習船に便乗し、南洋諸島を旅する。翌年『南洋時事』を刊行。対外危機を警告し、海外進出を説き地理学者としての文名があがる。明治21三宅雪嶺らと政教社を立て、雑誌『日本人』を発行。国粋主義の論陣を張る。明治27日本アルピニズムの先駆的著書である『日本風景論』刊行。明治31マーカス諸島所属問題で斡旋に入り、東京府管轄下(南鳥島)とさせる。明治37日露戦争に従軍し、そのルポルタージュを9～11月まで『国民新聞』に連載。明治43と大正11世界漫遊。「文学会」参加者。(戸田博子編『生誕百三十年記念誌 志賀重昂－回想と資料－』参照)	東南アジア 欧米諸国
志賀 潔 (23通)	1870～1957 明治3～昭和32 宮城県	細菌学者。佐藤家に生まれたが母の生家志賀家の嗣子となる。東大卒業後、すぐに伝染病研究所に入り、北里柴三郎の指導により明治31赤痢菌を発見して一躍世界に知られる。明治34ドイツ留学。明治38医博。大正3 伝染病研究所の東大移管に際し、北里と志を同じくする人々とともに同所を辞し、大正4新設された北里研究所に入る。大正9慶大教授、大正14京城帝大の初代医学部長、その後総長となる。	ド イ ツ
渋沢 栄一 (14通)	1840～1931 天保11～昭和6 埼玉県	実業家。慶応3パリ万国博覧会に出席する徳川昭武に随行して渡欧し、各国の近代的産業設備や経済制度を見聞。このときの巡遊によって得た産業・商業・金融に関する知識は、後年日本資本主義の指導者として近代化を推し進めるのに役立った。明治6自ら立案した銀行条例にもとづき、第一国立銀行を創立。生涯に500余の会社を設立。同志社大学設立に際し寄付し、新島襄に協力する。蘇峰に書類の正しい出し方を教える。	欧 州

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年出身地	解 説	渡 航 先
島川毅三郎 (3通)	1867~1908 慶応3~明治41 三重県	吉林領事。小村寿太郎の知遇を得て、小林が義和団事件後に駐清公使となると、島川は小村の幕僚として活動し、内田康哉が小村にかわって着任すると、内田の幕僚として、北京における各種新聞の操縦や清国朝野の人士と交際し、意志疎通を図る活動をした。故郷への帰国途上中国にて客死。展示書簡は明治34年1月ベルリンから蘇峰に宛てた絵葉書。	中 国
島崎藤村 (春樹) (1通)	1872~1943 明治5~昭和18 長野県	詩人・小説家。明治学院卒。明治26に北村透谷らと『文学界』を創刊。明治30発表の『若菜集』は浪漫主義の詩集。のち散文に転じ、明治39『破戒』を自費出版し、自然主義の小説家として出発。大正に入って間もなく、フランスへ旅立ち、第一次大戦勃発のためパリ永住の志を捨てて、大正5 帰国。大正8『新生』を書き精神的危機を脱する。昭和4から『夜明け前』を『中央公論』に連載。昭和11アルゼンチンで開かれた国際ペンクラブ大会に日本代表として出席。昭和18から着手した長編小説『東方の門』は未完。	フランス アルゼンチン
島田 翰 (6通)	1879~1915 明治12~大正4 東京	書誌学者。漢学者重礼島田篁村の次男。東京外国語学校支那語学科卒。20歳の時、父を亡くし、遺言で父の同僚・井々竹添進一郎に師事し、『左氏会箋』の校勘の手伝いをした。宮内大臣田中光顕の知遇を得て、宮内省図書寮の珍籍や各文庫の古書を閲覧することができた。幼年より漢文に秀で、漢籍を中心とした書誌学に鬼才を示し、25歳の時の主著『古文旧書考』は翰の才能を認めた蘇峰によって、明治38年に民友社から五百部出版された。中国の四大蔵書家の一つである陸心源の旧蔵書を三菱の岩崎弥之助が購入する際も力を尽くし、蔵書の散逸を防いだ。また清末の考証学者翁棗をはじめ中国の漢学者とも交流を深めた。翰は古書を愛するあまりに、無断で本を持ち帰り、足利学校の「論語事件」や金沢文庫称名寺の「文選集註」流出に関係し、刑事事件になった。入獄が決まった大正4年7月28日に、横浜の某所でピストルにより自殺した。享年37歳。翰の一族は、母の祖父が儒学者塩谷谷陰であり、兄・義兄など有名な漢学者揃いであった。永井荷風とは、東京外国語学校で同窓であった。同級生には、文求堂の田中慶太郎もいた。蘇峰は翰の蔵書の一部を明治36年暮れに買い、これが「成賞堂文庫」の基礎の一部となった。	中 国
島田清次郎 (9通)	1899~1930 明治32~昭和5 石川県	小説家。生田長江の推薦で大正8に出版された長編小説『地上』がベストセラーになる。蘇峰は「この主人公大河平一郎の如き青年があと十人もあらば、日本の前途は憂うに当たらずと思惟せられ候」と絶賛した。大正11『地上』の印税で世界漫遊に出かける。傲慢な態度が世間の非難を受け、最後は保養院で病死。全9通の島田清次郎書簡のうち、4通は保養院からのもの。清次郎は蘇峰を「おじいさま」と呼んだ。	イギリス アメリカ ドイツ イタリア 他
下田歌子 (8通)	1854~1936 安政1~昭和11 岐阜県	女子教育者。東条琴台の孫。本名平尾せき。「歌子」という名は明治6年末頃、その歌才に目をとめられた皇后より賜った。明治5より7年間宮中出仕。明治12退官、父の勧めで下田猛雄と結婚。2年後の明治14私塾桃天女塾を創立し、伊藤博文始め、政府要官の子女や華族の子女を教育。明治17夫と死別。明治18華族女学校(学習院女学院)校長。宮中に隠然たる勢力をもち、いくつかのスキャンダルは当時の新聞を賑わした。明治26からヨーロッパ、アメリカを外遊し、明治28帰国。死に至る数年は『源氏物語講義』の述作に当たったが、第1巻のみ刊行。	ヨーロッパ アメリカ カナダ 旧満州 朝鮮
釈 宗 演 (洪嶽・楊伽窟) (41通)	1859~1919 安政6~大正8 福井県	禅僧(臨済宗)。明治4京都妙心寺の越溪により得度。明治11鎌倉円覚寺の今北洪川に参じ、印可を得る。明治18慶応義塾で学び、福沢諭吉のすすめでセイロンに渡航。厳しい修業をした。明治25洪川没後円覚寺派官長となる。翌年シカゴの万国宗教大会に日本仏教者を代表して参加し講演。明治38再び渡米。欧州各地を周遊。この時の通訳が鈴木大拙。日露戦争では、従軍布教師として第一線を巡回。政・財界、知識人に多くの信奉者を持ち、夏目漱石も明治27年末から28年正月にかけて、宗演のもとで参禅する。『碧巖録』を教本とした講演をした。	セイロン (スリランカ) アメリカ 欧 州

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
榛葉賢雄 (9通)	1885～1954 明治18～昭和29 佐賀県	南米アルゼンチンへ日本人で最初に入植。明治31日本とアルゼンチンは修好通商条約を締結。その2年後アルゼンチンの練習艦が日本の港を歴訪し、長崎で働いていた榛葉は同艦の乗組員として採用され、移住。当時15歳であった。アルゼンチンで商社に勤めながら大学で学び、独立して貿易会社を興す。日本企業の支店長なども努める。日亜両国の交流・親善を図る文化協会の創設に尽力。日本新聞社の通信員も務め、スペイン語地元紙の論説も書き、日本を紹介する著書も記す。フエノスアイレスからの絵葉書7枚を展示。	アルゼンチン
末広鉄腸 (重泰) (10通)	1849～1896 嘉永2～明治29 愛媛県	政治家・小説家。藩校明倫館の教授、役人などをつとめた後、上京して大蔵省に入るが、言論人として立つことを志し退官。明治8『曙新聞』入社、のち『朝野新聞』に転じ活躍。成島柳北とともに筆禍で入獄。明治14自由党に入り活動。民権派の論客として知られる。のち馬場辰猪らと独立党を組織。明治19政治小説『雪中花』翌年『花間鶯』を発表し、大衆の人気を博した。明治21欧米を漫遊し翌年帰国。『東京公論』『国会新聞』などの主筆を歴任。国会開設後は第一回衆院議員として活躍。その間、シベリア、中国北部を視察旅行。言論人、政治家として自由民権を唱道しつつ、国民の政治思想の向上をはかり官民調和の政党政治の確立を目指した。文学者としては、漢詩文や紀行文もすぐれる。「文学会」に出席。	欧米 シベリア 清国 韓国
末松謙澄 (青萍) (26通)	1855～1920 安政2～大正9 福岡県	政治家・法学者。ケンブリッジ大卒。伊藤博文の娘婿。福地源一郎の東京日日新聞社に入り、文名をうたわれ、伊藤博文の知遇を得、明治9黒田清隆特命全権大使とともに渡韓。明治11～19イギリス留学中に『源氏物語(抄)』英訳。各界の名士を網羅した演劇改良会を組織。日露戦争中渡英し、『旭日』『日本の面影』を英文で出版し、日本の文化、思想を紹介。「文学会」で「源氏」について依田学海と論争。	韓国 イギリス
菅了法 (桐南) (6通)	1857～1936 安政4～昭和11 島根県	僧侶・評論家。明治初年慶応義塾に学ぶ。オックスフォード大。『東洋新聞』を創刊して国家主義を唱える。蘇峰主催の「文学会」に出席。僧侶の身であるから「文学会」をやめさせて欲しいと申し出る。	イギリス
杉村楚人冠 (広太郎) (9通)	1872～1945 明治5～昭和20 和歌山県	ジャーナリスト。東京のユニテリアン自由神学校卒。通訳・翻訳に従事。『国民新聞』の英文翻訳。明治33仏教会革新のため『新仏教』を発売。明治36東京朝日新聞社に入社。明治37～38にイギリスに特派。帰国後外国新聞社に学び、調査部創設、記事審査部の設置、縮印版の刊行など新聞事業の発展に尽力。校正係の石川啄木の才能を認め彼を選者に「朝日歌壇」を設けた。夏目漱石、釈宗演とも交遊。	イギリス
鈴木大拙 (貞太郎) (1通)	1870～1966 明治3～昭和41 石川県	宗教家。明治23に鎌倉の臨済宗円覚寺に参禅、今北洪川、のちに釈宗演に師事する。宗演の推薦で明治30アメリカに渡り、哲学者ポールケイラスの助手となり、『大乘起信論』を英訳した。11年間に渡るアメリカでの働きが、英語で講義をするのに、困る事がなかった。禅思想を平明に説いてその普及に努める。明治42帰国後、学習院教授、東大講師をへて、大谷大教授となり、英文雑誌『Eastern Buddhist』を創刊。昭和11世界宗教会議に日本代表として出席、イギリス、アメリカの諸大学で「禅と日本文化」の講義を行う。学士院会員となり昭和24文化勲章受賞。96歳まで生き、最後まで禅の普及に努めた。大拙はよく歩いた。歩くことが96歳まで元気に講演することを可能にしたのであろう。禅を「ゼン」として世界に広めた功績は大きい。大拙が好んだ禅語は「ひじ外に曲がらず」「花は紅 柳は緑」。展示書簡は上海からのものである。	イギリス アメリカ
高木信威 (清蔭) (6通)	1872～1935 明治5～昭和10 静岡県	ジャーナリスト・政治学者。明治25より『国民新聞』『国民之友』『静岡新報』『やまと新聞』『中央新聞』などの理事、主筆。『東京日日新聞』の編集局長。大正12中央大教授。大正3～5イギリスに渡り、政治経済問題を研究。ロンドン王立学芸協会の終身会員。著書『十二文豪ゲータ』。	イギリス

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
高島北海 (3通)	1850～1931 嘉永3～昭和6 山口県	日本画家。フランス人の地質技師にフランス語と地質学を学ぶ。明治17イギリスのエジンバラで開かれた万国森林博覧会に出張し、引き続きイギリス各地、ヨーロッパを歴訪。その後4年間フランスのナンシー森林学校に留学。地質学者、森林学者の目で対象を見つめ、独自の画風を展開した。アール・ヌーボーに影響を与え、ナンシーの美術館はじめ、フランス各地に多数の絵が所蔵されている。	イギリス フランス
高楠順次郎 (雪頂) (6通)	1866～1945 慶応2～昭和20 広島県	インド学・サンスクリット学・仏教学者。オックスフォード大卒。明治23イギリスに留学。マックス＝ミュラーのもとでサンスクリット学を研究。「観無量寿経」などを英訳。	イギリス
高平小五郎 (4通)	1854～1926 安政1～大正15 岩手県	外交官、政治家。日露戦争のポーツマス講和会議では、全権委員として条約調印に当たり、その後はアメリカ大使として老練な外交手腕を発揮し日米友好促進に努力。展示書簡は外遊中の蘇峰に宛てたもの。	アメリカ 欧 州
高山秋洲 (1通)		ブタベストを見物して、その様子を書き知らせた明治40年9月6日付の絵葉書を展示。	ハンガリー
竹越与三郎 (三叉) (45通)	1865～1950 慶応1～昭和25 埼玉県	歴史家・政治家。慶応義塾卒。『国民新聞』『時事新報』の記者をつとめ、社説を担当。真相を伝え度々筆禍事件を起こしたが、蘇峰は竹越に任せていた。『新日本史』『二千五百年史』を著述。明治28民友社から離れる。第3次伊藤内閣の西園寺公望外相のもと、文部参事官になり、明治32渡欧。著書『十二文豪 マコウレー』	欧 州
橋 瑞 超 (34通)	1889～1968 明治22～昭和43	探検家。真宗本願寺派の僧。中央アジアにおける第2次大谷探検隊のメンバーとして野村栄三郎とともに、天山北路を中心に仏蹟調査。第3次大谷探検隊員として、単身シベリア経由で敦煌に向かう。一時連絡不通、吉川小一郎が捜索に派遣され、明治44 蘭州で再会。帰国後、ウイグル文字の研究に励み、その解読に成功。著書『新疆探検記』。展示中の『沙漠漫遊記』は、1910.12.2～1911.3.4クチャまでの探検の記録の写しで、大谷光瑞から蘇峰に宛てられた書簡に付されていた。これはそれまでの紀行文の空白をうめる日記である。	西 域
田中逸平 (天鐘道人) (18通)	1882～1934 明治15～昭和9 東京	回教徒。台湾協会学校(拓殖大)卒。明治37日露戦争に際し、陸軍通訳となり特別任務に従う。大正12中国人回教徒とともに聖地メッカに行き、回教徒となる。大正14帰国して大東文化学院教授となる。昭和8再び聖地巡礼し、サウジアラビア国王と会見。バクダットよりの絵葉書など展示。	中 国 サウジアラビア
団 琢 磨 (4通)	1858～1932 安政5～昭和7 福岡県	実業家。マサチューセッツ工科大学卒。明治4 岩倉使節団としてアメリカ留学する。旧藩主黒田長知に金子堅太郎とともに随行する。鉱山学を修める。三井を日本の石炭王にする。大正3益田孝の後継者として三井合名会社理事長となり、財閥の中心人物となったが、昭和7血盟団員菱沼五郎に暗殺された。	アメリカ イギリス
珍田捨巳 (5通)	1856～1929 安政3～昭和4 青森県	外交官。東奥義塾の第1回留学生として米国アスペリー大学に留学後、母校で教授兼牧師をつとめる。明治18大隈重信の招きで外務省に入り、サンフランシスコの領事をふりだしに、各国の公使を歴任。日露戦争の前後の難局に際しては、小村寿太郎外相を補佐。明治41ドイツ大使に赴任し、税権回復の条約交渉を担当。ベルサイユ講和会議の全権委員。皇太子時代の昭和天皇の外遊の際の供奉長、後に侍従長。大正元、駐米大使としてワシントン州ボトマック河畔の桜植樹に立ち会う。	欧 米

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
角 田 柳 作 (4通)	1877~1964 明治10~昭和39 群馬県	ジャーナリスト・教育者。アメリカに日本学を育てる。明治29東京専門学校を(早大)卒業し、東京民友社編集部に勤める。その後中学で英文学や社会学を教える。明治42~大正6 ハワイに渡り、ハワイ中学校長となる。大正6 アメリカへ渡り、コロンビア大学で学ぶ。昭和3コロンビア大学内に日本文化研究所を創設。また日本の思想史、歴史、古典文学などを教える。ドナルド・キーン他 人類学者のエンブリや歴史学者のノーマン、美術家のソーバーなど優秀な学生を指導し育てる。昭和37コロンビア大学より名誉文学博士号授与。昭和39ハワイで客死。(柳井久雄著『角田柳作先生』参照)	ハ ワ イ ア メ リ カ
鶴 見 祐 輔 (7通)	1885~1973 明治18~昭和48 岡山県	政治家・著述家。後藤新平の娘婿。鶴見和子・俊輔の父。東大卒。鉄道省運輸局総務課長を最後に大正13官途を離れ、以来ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア・インド各国の大学等に遊説。太平洋会議に毎回出席。民間外交を推進。第1次鳩山内閣の厚相。政治評論・小説を多数著した。著書『自由人の旅日記』『後藤新平』(編)全4巻	ヨ ー ロ ッ パ ア メ リ カ オ ー ス ト ラ リ ア イ ン ド
東 郷 昌 武 (17通)		生活改善中央会理事・同志社卒。米国留学、アメリカの各州から蘇峰に宛てた絵葉書多し、昭和7年蘇峰の古稀祝賀会に出席。	ア メ リ カ
徳 富 蘆 花 (健次郎) (146通)	1868~1927 明治1~昭和2 熊本県	小説家。蘇峰の5歳年下の弟。兄と同じく同志社に学び、中退。兄の主宰する民友社の社員となり、明治31から『国民新聞』に連載した『不如帰』が出世作となる。兄弟の不仲のことが世に語られるが、蘇峰に宛てた蘆花の書簡からは自分の気持ちをすべて受けとめてくれる大兄の心を期待している正直な弟の思いがあふれている。展示中の明治30年1月8日付の書簡は外遊中の蘇峰に宛てたもので、東京から逗子に移り住むことを伝えた長文のものである。民友社で働くことがいやになったことや、両親のそばで孝行したいことなどが書かれている。明治39聖地巡礼の旅でパレスチナからロシアへ赴き、トルストイを訪問。明治43「大逆事件」に際し、一高で「謀反論」と題する講演を行った。昭和2年療養先の伊香保温泉に駆けつけた蘇峰と和解する。	バ レ ス チ ナ ロ シ ア
留 岡 幸 助 (109通)	1864~1934 元治1~昭和9 岡山県	社会改良家。同志社神学部卒。キリスト教に入信。明治24北海道空知監獄の教誨師となる。明治27渡米、感化事業を学び明治31巢鴨監獄の教誨師となり、明治32巢鴨に不良少年感化のための家庭学校を創設。北海道、神奈川県下にも分校を設ける。蘇峰は雪の中北海道の家庭学校を訪ね感激する。	ア メ リ カ イ ギ リ ス ド イ ツ
外 山 正 一 (3通)	1848~1900 嘉永1~明治33 江戸	哲学者・教育者。静岡藩士の子。16歳で開成所教授方に任せられ慶応2中村正直など英国留学。明治3渡米。ミシガン大学で哲学・理学を学ぶ。明治9帰国して東大教授となり、社会学・哲学を講義。明治30東大総長。明治31伊藤内閣で文相。漢字排斥を主張し羅馬字会創立。哲学会の創立にも尽力。音楽・演劇を論じ、女子教育を奨励するなど各方面に先覚的役割を果たす。著書『新体詩歌集』『演劇改良論私考』など	イ ギ リ ス ア メ リ カ
烏 居 き み (2通)	1881~1959 明治14~昭和33 徳島県	人類学者烏居龍蔵の妻。結婚後、龍蔵のフィールドワークに同行し、夫を助けた。きみ子がいることで、現地の女性が心を開いてくれた場面もあったという。その後生まれた4人の子供たちも父の調査を手助けた。きみ子は『土俗学より観たる蒙古』という立派な著書がある。今年度特別展に書簡とともに展示。	モ ン ゴ ル な ど
烏 居 龍 蔵 (1通)	1870~1953 明治3~昭和28 徳島県	考古学者・人類学者。日本の草分けの人類学者である。東アジアの考古学と人類学に不朽の業績を残した。40年間にわたって続けた海外調査は30回以上を数える。明治29第1回目の台湾調査へは、人類学調査初めて写真機が持ち込まれ、原住民3人に囲まれ調査する若い龍蔵の貴重な乾板写真が残っている。台湾調査は4回に及んだ。明治41、市原きみ子と結婚。以後きみ子は龍蔵のフィールドワークに同行。大正13東京帝大辞職直後、「烏居人類学研究所」を創立し、家族全員が研究員となり、調査・研究にあたった。(産経新聞「日本人の足跡」取材班著『日本人の足跡-世紀を越えた「絆」を求めて-』参照)	台 湾 中 国 サ ハ リ ン シ ベ リ ア 旧 満 州 モ ン ゴ ル 朝 鮮

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
中井 桜洲 (弘) (3通)	1838～1894 天保9～明治27 鹿児島県	政治家。漢詩人。18歳で脱藩。土佐の後藤象三郎の援助で英国に数年間留学。維新後、各国公使応接掛。明治5渡米、明治8から英国公使館書記生として欧州を巡り、明治9帰国して『漫遊記程』を刊行。明治26京都府知事。	イギリス アメリカ 欧州各国
中江 兆民 (篤介) (44通)	1847～1901 弘化4～明治34 高知県	自由民権思想家。明治4～7フランスに留学。帰国後仏蘭西学舎(のち仏学塾)を開き、フランス流民権主義を教えた。西園寺公望らと『東洋自由新聞』を創刊。専制政府を攻撃。明治15ルソーの『社会契約論』を漢訳・解説した『民約訳解』を刊行。人民主権を説き、蘇峰の漢文の素養を認め、敬していた。「東洋のルソー」といわれる。保安条例で東京を追われ、大阪で『東雲新聞』を発刊。明治23衆院議員に当選したが、土佐の裏切りを憤って翌年辞職。喉頭ガンのため余命一年有余を宣せられ、『一年有半』『統一有半』を著す。門人に幸徳秋水らがいる。兆民は蘇峰の私塾「大江義塾」を酒井雄三郎とともに訪れている。	フランス
中島 裁之 (6通)		清国北京日本公使館。明治34駐清公使内田康哉が就任すると、民間人の中島他2名は清国内地の事情調査の任についた。同年北京に東文学社を創立。東文学社は中国人に近代知識と日本語を教授する目的の私立学校。国際親善協会会長。アフリカよりの絵葉書あり。	中 国 アフリカ
夏目 漱石 (金之助) (1通)	1867～1916 慶応3～大正5 江戸	小説家。東大卒。東京高師、松山中学、五高教授を経て明治33イギリス留学。帰国後一高・東大各講師になる。正岡子規を知って俳句を学ぶ。『ホトトギス』などに評論文を発表、明治38から『我輩は猫である』を連載、小説家としての活動を開始する。そのうち、教職を辞して朝日新聞社に入り作家生活をはじめた。優れた門下生を出す。蘇峰が出版した五山版『百人一首』への礼状が蘇峰に宛てられた漱石からの一通である。	イギリス
成瀬 仁蔵 (2通)	1858～1919 安政5～大正8 山口県	教育者。7歳で母を、16歳で弟と父を失う。明治8小学校教員となる。明治11梅花女学校が開講され、主任教師となり、女子教育の第一歩を踏み出す。明治23アメリカ留学。アンドバー神学校に入学し、女子教育の研究を行う。明治27帰国、女子大学設立運動に着手。女子高等教育不要論などと非難を受けながら、明治34日本女子大学本校を開設。大正8年3月肝臓癌の為永眠。「信念徹底」「自発創世」「共同奉仕」を揮毫した。 青木生子著『いまを生きる成瀬仁蔵－女子教育のパイオニア』参照	
新島 襄 (8通)	1843～1890 天保14～明治23 江戸	キリスト教の代表的教育者。安中(群馬県)藩士の子。アマースト大、アンドバー神学校卒。同志社創立者。元治1密出国してアメリカに渡り、10年間滞在。その間洗礼を受け、キリスト教徒となる。明治4にアメリカにきた岩倉具視大使一行の計いで、欧米諸国の教育事情を見学・調査し報告書の作成に参与。帰国後、米国の組合派ミッションの資金援助を得て、明治8同志社英学校、明治10同志社女学校を創立。明治12神学校第1回卒業生には小崎弘道、横井時雄、海老名弾正らがいる。明治17同志社大学設立計画を発表して、大隈重信・井上馨・渋沢栄一・岩崎弥之助らの募金をえる。生涯キリスト教精神に基づく教育に専心し、同志社の発展のために心血をそそぎ、その途上たおれた。	アメリカ ヨーロッパ
新渡戸 稲造 (2通)	1862～1933 文久2～昭和8 岩手県	教育者。明治4年9歳で上京、私立の英学校で学び、11歳で東京外国語学校入学。15歳で札幌農学校第二期生として入学。翌年内村鑑三らとともに受洗。明治17東京大学を退学し渡米。ジョンズ・ホプキンス大学入学。その後ボン大学で農政学など学ぶ。明治24メアリー・エルキントンと結婚し、帰国。札幌農学校教授となるが、病気の為辞任。静養の為渡米し、明治32『Bushido the Soul of Japan』を米国で出版。抜群の英語力を誇った。明治34台湾総督府技師となり、明治39第一高等学校校長となる。(明治43蘆花は一高で「謀反論」を講演する)大正7東京女子大学初代学長となる。クエーカー教徒として戦争に反対し、生涯を国際平和の為に献げ「太平洋の橋になりたい」という青年時代の夢を実践した。昭和8カナダで開かれた太平洋会議に出席し、同地で客死。近代日本が生んだ偉大な国際人であった。	アメリカ ドイツ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
服部宇之吉 (3通)	1867～1939 慶応3～昭和14 福島県	東洋哲学者。書誌学者島田翰の姉繁子の夫。東大卒。文部省に入り、明治32～35中国・ドイツに留学。帰国後東大教授。清国政府から北京大学堂師範総教習として招かる。大正4ハーバード大教授となり、大正15京城帝大総長。退官後、日華学会などを主宰し、中国の礼の思想の体系化につとめた。	中 国 ド イ ツ ア メ リ カ
原田直次郎 (20通)	1863～1899 文久3～明治32 江戸	洋画家。東京外国語学校仏文卒。高橋由一の天絵学舎に入って洋画を学び、明治17ドイツに留学。ミュンヘンで歴史画・風俗画を学んだ。留学中森鷗外に出会う。鷗外の『うたかたの記』は原田直次郎がモデルであるといわれる。明治美術会の創立に加わる。鷗外の訳詞集『於母影』の口絵など描く。展示書簡は『国民之友』の初期の表紙のデザインを書きこんだもの。	ド イ ツ
平福百穂 (42通)	1877～1933 明治10～昭和8 秋田県	日本画家。東京美術学校卒。日本美術院の理想主義に対抗して写生主義をとえ、『国民新聞』をはじめ雑誌や新聞に挿絵を執筆。軽快・洒脱な筆致の時事的なスケッチは紙面に生彩をそえた。文展で世に認められ金鈴社を結成。スケッチ風の筆法を骨格に独自の風格はすぐれた素質と力量を示す。朝鮮行の蘇峰に同行。文部省在外研究員としてローマ・ドイツ歴訪。アララギ派歌人としても有名。	ロ ー マ ド イ ツ 朝 鮮
深尾須磨子 (17通)	1888～1974 明治21～昭和49 兵庫県	詩人。京都菊花高女。大正10夫深尾贊之丞の遺稿集『天の川』の巻末に自作の詩54篇を付し出版、与謝野晶子に師事し『明星』末期の女流詩人として出発。大正12～昭和16までフランスなどに外遊。昭和28日本婦人団体連合会評議員。昭和33第4回世界婦人大会(ウィーン)に出席。昭和37平塚らいてうとともに「新日本婦人の会」結成に大きな役割を果たす。	フ ラ ンス
福沢桃介 (6通)	1868～1938 明治1～昭和13 埼玉県	実業家。岩崎紀一の子。福沢諭吉の養子となり、のち分家。慶応義塾卒。明治21アメリカに渡り、ペンシルバニア鉄道の見習をした後、帰国。明治39瀬戸鉱山を設立し木曾川筋八百津発電所、大阪送電などを建設・設立。大正9大同電力を設立、社長に就任。晩年は川上音二郎の妻であった貞奴と名古屋の地で暮らす。蘇峰宛書簡には「鮎を贈る」とあり毎年鮎が届けられた。	ア メ リ カ
福地桜痴 (源一郎) (14通)	1841～1906 天保12～明治39 長崎県	ジャーナリスト。医者の子で、安政3、15歳で蘭学を学び、2年後江戸に出て英学を学び幕府の通訳・翻訳の仕事をする。文久1渡欧。渡欧中、言論特に新聞に深い関心を抱くようになり、またシェークスピアにも熱中した。明治1『江湖新聞』を発行し、佐幕派の論陣を張り、新政府から逮捕、発行禁止の処分を受ける。明治3～7新政府に仕え、岩倉具視大使の欧米巡遊に一等書記官として加わる。帰国後『東京日日新聞』主筆。以後政府擁護の立場で自由民権批判の筆をふるう。演劇にも深い関心を持ち、歌舞伎座を創設し「春日局」などの脚本も書く。蘇峰は福地源一郎の活躍に憧れジャーナリストを志した。	欧 米
藤田茂吉 (鳴鶴) (1通)	1852～1892 嘉永5～明治25 大分県	新聞人・政党人。佐伯藩校四教堂などで学び、明治9矢野龍溪と共に慶応義塾入塾。時事批評家、行動派で、政府系だった『郵便報知新聞』を民権派新聞に育て上げた。筆力確かな論説の中に「国境なき医師団派遣」などのユニークな提唱もある。明治22長年の夢であった欧米漫遊に出発。帰国後、『観風叢話』を著す。明治25年8月28日、茂吉の葬儀の日、犬養毅は名文の誉れ高い弔文を読む。かつて学資送金が絶えた犬養を茂吉が助けた縁であった。(野田秋生著『駆け抜ける茂吉―「先覚記者」藤田鳴鶴評伝』参照)	フ ラ ンス イ ギ リ ス フ ラ ンス ド イ ツ オーストリア ス イ ス スコットランド ア メ リ カ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
二葉亭四迷 (長谷川辰之助) (3通)	1864～1909 元治1～明治42 江戸	小説家・ロシア文学の翻訳家。東京外国語学校露語科中退。坪内逍遙を知りその影響を受け、明治20近代日本文学史上最初の本格的リアリズム小説である『浮雲』を著わす。言文一致体の翻訳『あひびき』『めぐりあい』を発表。明治35ハルピン、北京に赴く。明治41『朝日新聞』特派員として、ペテルスブルグに赴いたが肺結核が悪化して、ベンガル湾航行中の船室で病死。シンガポール郊外で火葬。	中 国 ロ シ ア
益 田 孝 (鈍翁) (62通)	1848～1938 嘉永1～昭和13 新潟県	実業家。文久3 幕府の使節に随行してフランスに渡る。三井財閥の基礎固めに尽力。茶道復興に尽力し、茶道具など数千点の美術品を収集。蘇峰を茶会に招く。	フランス
松 方 正 義 (80通)	1835～1924 天保6～大正13 鹿児島県	政治家。第4・6代の総理大臣。明治10フランス万国博覧会に事務局副総裁兼事務官長として渡欧。財政に関し、多くの知識を得た。明治30金本位制を実施。同年蘇峰は欧米漫遊より帰国し、第2次松方内閣の内務省勅任参事官に任じられたが、松方内閣総辞職と共に内務参事官を辞す。徳富蘇峰編『公爵松方正義伝』全2巻あり。	フランス
宮 崎 滔 天 (寅藏) (4通)	1871～1922 明治4～大正11 熊本県	志士。中国革命の援助者。宮崎八郎・民蔵の弟。大江義塾・東京専門学校(早大)等の中退。自由民権運動やキリスト教に影響され、兄民蔵(社会運動家)の感化もあり、社会主義やアジア問題に深い関心を抱いた。シャム(タイ)に渡ったのち、中国革命運動調査のため中国に渡る。帰国後、来日中の孫文と交遊し、中国革命の援助に尽くした。フィリピン独立運動も援けるが失敗。波瀾に富む半生であった。	タ イ 中 国
陸 奥 宗 光 (4通)	1844～1897 弘化1～明治30 和歌山県	外交官。慶応3 坂本竜馬の海援隊に参加。明治16～19まで欧米諸国に外遊、帰国後外務省に入る。伊藤内閣の外相。明治27イギリスとの間で条約改正を実現。日清戦争の遂行に精励し、下関条約では全権として活躍。「カミソリ陸奥」の異名をとる。展示書簡は、相談したいことがあるので、鹿鳴館まで来て欲しいという内容。	欧 米
元良勇次郎 (6通)	1858～1912 安政5～大正1 兵庫県	心理学者。同志社英学校第一期生。勇次郎の同志社での猛勉強ぶりに同窓生たちは敬意を表していた。明治14東京英学校(青山学院)教員となる。明治16渡米、ボストン大学、ジョンズ・ホプキンス大学で心理学・哲学・社会学を学び、明治21帰国。東大教授となり、心理学・哲学を講じる。科学的な心理学研究の開拓の功績は大きい。その他、教育・学術の振興にも尽力した。	アメリカ
森 鷗 外 (13通)	1862～1922 文久2～大正11 島根県	軍医・小説家・評論家。典医の子。東大医学部卒業後、陸軍軍医となり、明治17ドイツ留学。明治21帰国。明治22～23訳詩集『於母影』、小説『舞姫』を『国民之友』に発表。『於母影』の原稿料50円を基金として雑誌『しがらみ草紙』を創刊。蘇峰主宰の「文学会」にも出席。	ド イ ツ
森 田 思 軒 (文蔵) (90通)	1861～1897 文久1～明治30 岡山県	ジャーナリスト・文学者。慶応義塾卒。報知新聞社長の矢野龍溪に認められ同社入社。明治18中国からヨーロッパを歴遊。「龍動(ロンドン)通信」などを送る。『国民之友』に寄稿。ユーゴーの作品の紹介や翻訳、批評文を発表。『探偵ユーベル』『十五少年』などを翻訳。蘇峰とともに「文学会」の発案者の一人。	中 国 ヨーロ ッパ
矢 島 楨 子 (15通)	1833～1925 天保4～大正14 熊本県	女子教育者。結婚後10年で離婚。明治5上京し、教員伝習所に学ぶ。明治19レヴィット女史の来日に接して、日本基督教婦人矯風会を創立。明治19東京婦人矯風会会長。明治26日本基督教婦人矯風会会頭として廃娼運動に奔走。大正10平和を求める日本婦人1万名の署名を携え、国際軍縮会議に参加。ホワイトハウスでハーディング大統領に署名を手渡した。生涯を女子教育・婦人運動に尽くした。竹崎順子の妹。徳富蘇峰・蘆花兄弟の叔母。	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
矢野龍溪 (81通)	1850～1931 嘉永3～昭和6 大分県	政治家・小説家。慶応義塾卒。福沢諭吉の推薦で大隈重信の下で官吏となり、大隈とともに改進黨の結成に参画。その間『報知新聞』に入り、明治16に材をとった政治小説『経国美談』が大反響をよぶ。明治18新聞事業視察のため渡欧して翌年帰国。明治23『報知新聞』掲載の空想的冒険小説『浮城物語』も好評をえた。国会開設後政界を去り、一時伊藤博文らの推薦で式部官や外交官を務めたが明治32以降は政界を退いた。その頃から社会問題に関心を示し、明治35小説『新社会』を発表して再び世の注目を集めた。明治13三田予備校(後の錦城中学)を創立。友人の蘇峰も教壇に立ち講話をした。「文学会」の重鎮であった。	ヨーロッパ
山川健次郎 (3通)	1854～1931 安政1～昭和6 福島県	物理学者・教育家。エール大卒。旧会津藩士。藩校旧新館に学び、沼間守一にフランス語を学ぶ。明治3北海道開拓便の推挙でロシア、アメリカに留学。明治8帰国。明治12東大教授となり物理学講座を担当。明治21最初の博士号取得者として理博となる。東大・九州大・京大総長を歴任し、大学教育の確立に尽力する。晩年は国家主義的な教化運動につとめた。	アメリカ ロシア
山田三良 (2通)	1869～1965 明治2～昭和40 奈良県	法律学者。東大卒。明治30欧米に留学。ドイツのハイデルベルヒ大学、フランスのパリ大学で国際法を専攻。日仏会館の設立など、フランスとの文化交流に貢献。原水爆禁止署名運動全国協議会代表世話人。中山聖教殿建設に関与。	ドイツ フランス
山田寅次郎 (9通)	1866～1957 慶応2～昭和32 江戸	茶道宗徧流第八世家元。慶応義塾入塾。和歌山県沖でのエルトゥール号遭難事件後、全国から弔慰金を募ってトルコに渡り、日本とトルコの交流発展に尽力。その後もトルコにとどまる。日本から来た蘇峰・清浦奎吾・細川護成らの世話をやいた。三島製紙会長。東洋製紙を設立。大阪駐在ギリシャ国名誉領事。	トルコ
山室軍平 (88通)	1872～1940 明治5～昭和15 岡山県	宗教家。同志社神学校卒。明治20上京。印刷工となりキリスト教に入信。苦学して同志社で神学を学び、伝道に入る。明治28英国救世軍の来日を機に従軍。日本救世軍の創設・発展に尽力。明治32『平和の福音』刊行。民衆の説教者として各地を伝道。婦人・児童保護、貧困者医療など社会事業に貢献。	イギリス
山室宗文 (45通)		銀行家。三菱信託銀行会長。欧米留学。アメリカ大統領22人の肖像絵葉書などアメリカから様々な絵葉書にコメントを添えて蘇峰に宛て送っている。著書『我國の金融市場』『社債論(全)』展示中の明治41年1月27日付の大砲の絵柄の絵葉書には、「アメリカ人は凡て日本は戦争しはせぬかと心配して質問します。」とコメントが書きこんである。	アメリカ ヨーロッパ
山本悌二郎 (二峰) (8通)	1870～1937 明治3～昭和12 新潟県	政治家。有田八郎(外交官・外相)の兄。御料局給費生としてドイツに留学。明治33台湾製糖の設立に参画、その常務となる。三井承継会社の重役。田中義一・犬飼各内閣の農相を歴任。中国美術に深い理解を示し、中国書画を中心とした東洋美術品の蒐集につとめ、『澄懷堂書画目録』を著した。漢詩入り書簡あり。	ドイツ
吉野作造 (12通)	1878～1933 明治11～昭和8 宮城県	政治学者。東大在学中、キリスト教に入信。卒業後、中国に招かれ、明治42帰国。欧米留学の後、大正3教授。『中央公論』に政治評論を発表。大正5年1月号では「憲法の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」は大正デモクラシーに理論的基礎を提供した。当時の最も有力な民主主義思想であったため、右翼の浪人会から攻撃を受けたが、学生や知識人の圧倒的支持で撃退。大正13朝日新聞社入社。連載記事が筆禍を受け退社。東大講師に復帰し『明治文化全集』全24巻を編纂・刊行した。大正5東大の同僚・学生を連れて蘇峰の話聞きに来た。	欧米

蘇峰堂便り

蘇峰記念館三階の窓から見える太平洋は、時刻・季節の移ろいに合わせて、刻々と表情を変え、水平線はその向こうに広がる大海を想像させる。「海を渡った先覚者」は、その無限に広がる海濤の先に、何を求め、異国の地で何を想ったのか。

長い鎖国状態の後、明治元年に「五カ条の御誓文」で示された、「開国和親」という国の方針は、先人たちの心のベースにあったに違いない。「何よりの急務は、世界をして日本を知らしむると同時に、併せて日本が世界を知ることである。」（蘇峰自伝）と蘇峰が語っているように、まず交流の道筋をつけることが必要であつたらう。渡航した人々の書簡に触れ、その動向を調べると、それぞれ違った想いを胸に旅だつた先人たちが、学んだ知識・経験が日本に吸収され、海を越えてつながる国と国を結ぶかわりは、着実に深く、強くなつていったことを実感できた。と同時に、異国の地から、冷静な視点で日本を見つめ返し、先人達が蘇峰に書き送った書簡の多いことも驚かされる。

ロンドンで孤独を感じた夏目漱石にも、アメリカで禪の思想を説くことに専心した鈴木大拙にも、細長い島国「日本」がはっきり見えていたと思う。グローバル化が叫ばれる現代、海の向こうから視線を向けたとすると、私たちのまなざしの先に「日本」はどう映るのか。海を越えた先人たちの想いを改めて考え直したい気持ちになった。

宮崎松代

消え去つたもの美しくゆく雲の純白

父の晩年の句は、私を明治の薫りに包みこむ。明治は私の身近にあつた。

昨年は岩倉使節団派遣から百三十年であつた。一世紀以上も前に「海を渡つた」彼らは何を視たのか。また欧米の人々の眼に彼らは何のように映つたのか。当時のニューヨークタイムズ誌は「日本人は知的教養あり」と書いている。礼儀正しく毅然としている様子が評価されているのだ。古典を学び、漢学・国学の素養を身につけ、理解力や表現力に秀れていたという。百三十年を経て、現代の日本人はそれらを貧しくしてしまつた。

開国以降、海外へ行つた人々は、派遣団や留学・遊学のエリートたちだけではなかつた。明治元年には早くも約百五十名の人たちが集団でハワイに移つた。「元年者」と言われる移民の人たちである。国家的な使節団に先んじて国際交流の一端に加わつた筈だ。明治という国家に、それぞれの立場で何かを求めていった人々の足跡は、苦しみや悲しみも合わせて輝いている。

「フランスに行きたしと思へどフランスはあまりに遠し」とカンパスに向かつていた父は「沃野に培う筆 不朽のバルビゾン風景」などとまるで観てきたような句を作つた。明治後半に生まれた父は一度も海を越えることなく、二十一世紀を少し覗いて逝つてしまつた。

和田千枝

編集後記

今年、海を渡つた先覚者たちのテーマ展です。いままでの人脈とまるで違つた人と人が並んでいたりして、これは面白いと思つています。日本の黎明期、自分が国に何ができるかを思索し、実行した人々です。司馬江漢の世界地図を掛け、世界各国からの絵はがきを並べました。絵画は高島北海の六幅の風景画です。オール・ヌーボーに影響を与えたと言われる独特の清らかな絵画です。ご来館をお待ちしています。

(この・しずこ)

平成十四年三月二十日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒三三〇三三 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL ○四六三二七一一〇二六六

FAX ○四六三二七一〇六七七

ホームページ

<http://www2.ocn.ne.jp/~tsoho/>

E-mail:tsoho@peach.ocn.ne.jp